囲碁に学ぶ大局観

第3回： 礼節

日本人の「礼節」について、古代中国（日本の飛鳥時代）の史書「隋書倭国伝」に、“・・・とても物静かで、争いごとも少なく、盗みも少ない。性質は素直で雅風がある・・・。”と記されているようです。外国人が感じた日本人像に関する最古の記述でしょう。

さて、東日本を襲った未曽有の複合災害の実態が次第に明らかになると同時に、歩み始めた復興には世界中の目が注がれています。そこで今回は、必死に復興に立ち向かう被災者の方々及びそれを支援する人々の行動を、囲碁に学ぶ「礼節」という切り口で考えてみたいと思います。

震災直後パニック状態にあった全ての世代の被災者の皆様の冷静沈着で礼儀正しく秩序ある行動に対し、海外メディアが一斉に敬意と賛辞を伝えたことに誇らしく感じた日本人は多かったのではないでしょうか。また、各国政府が東日本に在住の自国民に対し退避勧告を出している中、ニューヨーク在住のコロンビア大学名誉教授で文化勲章受章者でもある 88 歳のドナルド・キーン氏が、逆に日本に帰化し日本の友人と共にいたいとの希望を表明されたとのニュースに触れ、アメリカ人の心根にも大変感動しました。

平時にはあまり意識しない「品格」「秩序」「高潔」という言葉が、人種や宗教を問わずいかに人々の胸を打つものかも知りました。

しかし一方、政府や東電経営陣の軽い言動が、そうした世界の賛辞を相殺してしまっている現実には憤りを感じます。国難にあえぐ日本は、今こそ見識と礼節を持った真のリーダーシップを必要としています。そのリーダーシップによって、放射能漏出の一刻も早い収束と被災地の基盤インフラの再構築に向けたより明確な意思を示した上で、復興後のビジョン（将来像）を描き、そしてそれに向けた諸施策や関連立法の速効が求められています。菅総理殿、ネット碁にはまっていらっしゃるとのこと、坐隠して“先手必勝”の策を熟慮なさっていることを祈るばかりです。平成 23 年 4 月 21 日の読売新聞「編集手帳」に紹介された、俳人・長谷川櫂氏の「震災歌集」の一句“顔見せぬ管宰相はかなしけれ　1 億 2 千万人のみなし子”を噛みしめて頂きたい。

また他方で、自らは安全サイドに身をおきながら、被災者の気持ちを逆なでするような憶測や誤った情報をネット上に流すことで、意識的ではないにせよ結果として被災者に甚大な精神的苦痛と経済的打撃を与えるという心無い傍観者がいることも事実。加えて、ビジネス・ライバルが意図的に被災企業の放射能汚染を誇大に吹聴するケースなどは、「礼節」とは真逆の恥ずべき行為でしょう。

このような風評被害を耳にして思い起こすのは、碁盤の“血だまり”の言い伝えです。
「血だまり」とは、足付き碁盤の裏側の中央部分に彫られたへこみ（へそ）の別称で、本来木材の乾燥による歪みや割れ防止と盤上の打ち石の響きを良くするために彫られたもののようです。これを“血だまり”と呼ぶのは、囲碁という真剣勝負をしている対局者に他人が口を挟むなという戒めになったとされています。つまり、口を挟んだ人は首を刎ねられ、その首をこのへこみに乗せられると警告しています。また、碁盤の脚は、クチナシの実の形を模しており、対局中の他人の“口無し”を掛けているそうです。今回の震災に乗じた“流言”“風評”こそ、要らざる他人の口出しで、

斬首に値すると言えましょう。（写真1参照）

碁盤裏の「血だまり」と「足」

「礼節」は、本来すべての人間が生まれながらにして持ち合わせている良識であり、価値観であると思います。しかし、それは年齢を重ねるにつれ、他の価値観に押されて心の中の相対的位置づけが低くなったり、歪められたりしてしまうのかも知れません。その性善の良識を生涯高く保ち続けている人は、その後の人生環境によって容易には崩れない“何か”を持っているような気がします。“三つ子の魂百までも“の格言のように、その“何か”を幼少年期に植えつけられた人ほど終生変わらぬ価値観・信条として保持されていくように感じます。

その“何か”を遊びながら自然に植えつけてくれる良きツールが囲碁であります。幼少年期の教育の場で真正面から取り組む以前に、囲碁に限らず、スポーツ、レジャーなどあらゆる場において楽しみながら自然に、その“何か”が身につく環境や仕組みをつくることも世の大人やリーダーたちの責務でしょう。

日常の社会生活における「礼節」の乱れをいわれて既に久しいですが、戦後教育の申し子「偏差値教育」がもたらした“想定外”の結果だったのでしょうか？　残念ながら礼節とか道義という価値観は、世の中を支えるすべての精神的基盤であるにもかかわらず、人々の心の隅っこに追いやられてしまった感があります。

そうした重要な使命を担う囲碁の普及活動の一例として、関西の「ライフこども囲碁クラブ」という囲碁教室をご紹介したく思います。このクラブは平成 16 年に創設されて以来、関西一円の 21 地域に設けられた教室におよそ 750 名の子どもたちが参加し、240 余名のボランティア指導者によって毎週土曜日に開講されています。子どもの知育、徳育を目的とし、“豊かな心と夢を持ち、21 世紀を担える子どもたちを育みたい……”との願いから創設された活動です。この教室では、囲碁の技術指導よりも礼儀作法やマナーの教育、また囲碁というゲームを介した“豊かなこころ”を持つ子どもを育む環境づくりに主眼をおいています。

このような地道な活動は全国他地域でも数多く展開されており、子供たちの将来に希望、勇気そして自信をもたらす成果につながっています。現場を取材しますと、受講生と指導者の年齢差が大きく、おじいちゃんと孫の関係に似て、得も言われぬ和やかな雰囲気の中にも規律の正しさに心が温まります。（写真2参照）

ライフ子供囲碁教室風景

現代の企業経営について産業社会学者・梅澤正氏は、短期的経済価値を追求するあまり、普遍的価値である“経営理念・信条”を軽視乃至は空念仏化する傾向にあると指摘しています。このことが、近年多発している企業不祥事（＝経営の醜さ）の根源的理由になっているのではと疑念を抱かざるを得ません。東電の経営者の皆様には、如何なる経営理念であれバックボーンとなるべき「礼節」を死守することに矜持を持って経営にあたって頂きたいと願うばかりです。それこそが、信頼回復と称賛に変わるための唯一の道でしょう。

紀元前５～６世紀の古代中国に生まれた儒家思想は、“己が欲せざる事を人にするなかれ”という「仁」の大切さ説いています。これも、2,500 年という歳月を経ると、進化ではなく陳腐化してしまうものでしょうか？

＜以上＞

足立敏夫
「囲碁と経営」研究家
（元・羽衣国際大学教授）

出所：株式会社キャリアクリエイツ月刊誌「LDノート」6 月号（2011 年）